

生活の柄

牧師 山本 護



「歩き疲れては、／夜空と陸との隙間にもぐり込んで寝たのである／草に埋もれて寝たのである／ところ構わず／寝たのである(生活の柄)」。山之口獏の詩「生活の柄」に出会ったのは1970年。高田渡がギター弾きながらこの詩を歌い、14歳の心はふるえ、この場所以外ならどこだっていい、と夜空と陸の隙間で寝ることを夢想しました。

幾年も過ぎて、神学校で学んでいた頃、初代教会の実像を見直す聖書学論争が盛んで、神学教師も神学生も「Sitz im Leben=生活の座」という言葉を口角に泡飛ばしながら使っていました。オリエント学や諸学を縦横に用いて、聖書の社会層を掘り起こす「生活の座」研究。ただどちらかというと私の関心は、いつの時代のことも集団ではなく個別の「生活の柄」で、得意げに口泡を飛ばすアカデミズムにも反感がありました。

「このごろはねむれない／陸を敷いてはねむれない／夜空の下ではねむれない／揺り起こされてはねむれない／この生活の柄が夏むきなのか!」。山之口獏が、己が困窮の日々を「生活の柄」として記す時、社会層としては捉えられない含羞(はじらい)があり、静かな誇りがあり、虚無と不思議な明るさがあって、個別の人格こそが輝かしい。

「ほかの種は、石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまった(ルカ 8:6)。「種を蒔く人」の譬えは、収穫豊かな良い土地に蒔きなさい(8:8)という比喩。とはいえ「生活の柄」として各々の種(8:5~7)に思いを寄せると、暮らしはそれぞれにあるんじゃないか、と正しい答えにこだわらない協道が見えて来ます。

八ヶ岳伝道所の礼拝堂を建て始めた頃、赤土が露出した敷地に堆肥を鋤き込み、良い土地(8:8)にしてクローバーの種をたくさん蒔いた。しばらくは気持ちのいい草地でしたが、数多なる野草との争いに負けて消えてしまいました。ところがこの夏、ふと足許を見ると、砂利を敷いた痩せた石地に(8:6)クローバーがのびのびと広がっている。多様な生存を垣間見させられ、「種を蒔く人」の読み方にも少しく影響したような気がします。

野草の住み分け事情は分からないけれども、嬉しくなって「生活の柄」を歌った。少年晩年に仰ぎ見た二人の人物、山之口獏の詩を、高田渡のような声調で歌いました。Ω